

二〇二五年度 光塩女子学院中等科【2/2】

国語入試問題

二〇二五年二月二日（日）実施

《注意事項》

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- ② 解答用紙に、受験番号（漢数字・算用数字どちらでも可）と氏名を書きなさい。
- ③ 解答は、解答用紙に書きなさい。
- ④ 記述問題の字数については、すべて句読点をふくみます。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

教養は幸運なときには飾りであるが、不運のなかにあつては命綱となる。

このことばは、古代ギリシアの偉大な哲学者、アリストテレスが語ったと、デイオゲネス・ラエルティオネス『ギリシア哲学者列伝』は伝えている。

(中略)

人びとが幸運な人生のうちにあるときには、教養は、人の精神を秩序づける。その人柄を美しく飾る。ただ、人生は、自然法則に支配される自然(あ)ゲンシヨウと異なつて、幸運と不運のうちにある。同じ人間として生まれながら、富裕な家庭に生まれた子どもと貧困な家庭に生まれた子どもでは、「運不運」が違ふとわたしたちは言う。わたしたちは、自分の人生の「生まれ」を選択することはできない。

わたしたち人間が生きているということは、この地球上に命を与えられ、その命を維持していくということを意味している。生まれるということは、命を与えられるということである。与えられるということは受け身である。「 1 」

他方、わたしたちは命をつなぐために、たくさんのことを選択する。「選択する」ということは、「選択肢をもつ」ということ、さらに「選択することができると」いうことも意味している。複数の選択肢のなかから選択することができるということは、選択の自由をもつということである。選択の自由があればこそ、わたしたちは、複数の選択肢から自らの意思でどれか一つを選ぶことができる。選択の存在こそ人間が「 2 」であることの根幹に位置しているのである。

ただ、選択が望みの結果をもたらすかどうかは、選択の時点で分かっているわけではない。わたしたちは選択を誤ることもある。この場合の「誤る」は、数学の解答を誤るという意味ではない。正しい答えを出せなかったということではない。①わたしたちは「正しい選択」というが、これは、数学の答えのような「正しさ」ではない。選択には、「よりよい選択」と「より悪い選択」、「どちらともつかない選択」がある。よりよい選択とは、わたしたちの願望の実現をもたらす選択、いわば幸福な状況をもたらす選択であり、そうでない選択が誤った選択、不幸をもたらす選択が悪い選択である。

さらに、よい選択をしたと思つても、選択の状況が変化するなかで不運が生じることもある。順調に進んでいた仕事突然の地震

で行き詰まってしまうこともある。わたしたちは、こういう状況を運が悪いとか、不運とかいう。

選択を誤ること、あるいは、不運に見舞われることで、わたしたちは困難な状況に陥る。困難な状況に陥ってしまうことの分岐点となった選択のことを、「選択を間違った」とか「選択が正しくなかった」、あるいは「選択はよかったが、運が悪かった」というのである。たしかに、「誤った選択」「正しくなかった選択」は回避したい。不運な出来事に出会うことも喜ばしいことではない。が、そういう選択をすること、そのような状況を生きていくこともまた、人間が「2」であるということに含まれている。ここで命のように、「与えられているもの」を「所与」と呼ぶことにしよう。わたしたちは、与えられた命のもので、すなわち、所与としての人生のうちにあって、選択する自由を与えられている。

所与と選択とが人間が存在するということの(い)根本的な条件である。A、人生は、所与と選択だけによって成り立っているわけではない。人生には、所与でもなく、選択でもない広大な領域が広がっている。遭遇という領域である。

わたしたちは、人生のなかで、さまざまな人びとや出来事に出会う。遭遇する。この遭遇もまた「所与としての生きていること」と「□」ついても□れない関係にある。所与をスタートとしてわたしたちの人生は進んでいくのであるが、そのなかでわたしたちはそれぞれにさまざまな人や出来事と出会うからである。しかし遭遇は所与ではない。選択でもない。

遭遇は選択ではないが、さまざまな遭遇は、他方でわたしたちにさまざまな選択肢を用意してくれる。②人生の豊かさは、この所与と遭遇によって用意される選択のなかにある。いろいろな人と出会い、いろいろな出来事に出会う。人との遭遇、出来事との遭遇によってさらにさまざまな選択肢が現れてくる。そのなかの選択によって人生は変化してゆく。選択によって出会うさまざまな人や出来事や風景が人生の彩りとなる。

社会に秩序が存在し、平和を維持している時代にわたしたちが生まれたとすれば、そのような状況もわたしたちの「所与」ということができる。そのような時代であれば、人びとは心安らかに暮らすことができるようにみえる。

しかし、そのような時代にも、人は時として困難な状況に遭遇する。戦争がなくても、人びとの間には対立や紛争があつて、ときには暴力に至る。(中略)

命の危機に遭遇することは不幸なことであるが、幸運に恵まれるだけがよい人生ではない。むしろ、さまざまな困難を克服すること、そのような克服を実現するための賢い選択を行うことこそが人生を豊かにする。困難な状況にあつてこそ、人間は賢い選択をする

ことができるからである。

命にかかわる危機のなかで何が人を救うことができるだろうか。アリストテレスの「教養は幸運なときには飾りとなるが、不運のなかにあつては命綱となる」ということばで、③わたしがあえて「命綱」と訳したのは、ギリシア語の「カタフィゲー」ということばである。アリストテレスは幸運なときの「コスモス（飾り）」と不運なときの「カタフィゲー」を対比させた。カタフィゲーは、文字通りには、「避難所」である。「避難所」は、危機のときに身を守る場所であるが、いざというときに身を守る力になるという意味では、むしろ「命綱」と言った方がいいと思う。これは、ほかの人が守ってくれる力という意味ではない。自らの心のうちにあつて、自分を守る力である。アリストテレスはそれが教養だといふのである。教養は、自分自身のなかに形成された生きるための底力だからである。私が理工系大学で哲学を教えていたとき、理工系学生のもつべき教養の大切さを（う）説く教授たちもたくさんいたが、その多くは、教養を④科学技術者が身に備えるべき「飾り」と考えていた。日本の科学技術者は、海外の学会に出席すると、懇親会のような交流の場で日本文化について質問を受ける。ところが、理工系の研究に専念してきた科学技術者、研究者は、日本文化の価値や意味についての問いに答えることも、あるいは自ら進んで紹介することも、自分の意見を述べることもできない。とくに最近では、日本の文化について造詣のある海外の研究者も増えているので、質問も相当深い（え）カンシンのもとに発せられる。

B、「教養の大切さ」を感じた教授たちは、「学生には、教養を身につけさせなければならない。ただ、それは専門でとんがった能力をもつことが前提であるが」という。つまり研究者として成功するためには高度な専門性を、そして恥をかかないためには教養を、という考えである。このような意味での教養とは、理工系教育に加えるべき文系の知識である。科学技術の専門家であることに加えて、文化的教養人になることも大切だという思想である。

わたしは、教養の本質はもっと別のところにあると考えている。「飾りとしての教養」に対して、わたしは、現代の若者が身につけるべき教養は、枝葉や花としての教養ではないと思つてゐる。それは「人間の根」としての教養である。これは「命綱」に通じる思想である。

人間を一本の木にたとえるならば、その根っこにあたるのが教養である。一本の木が生長してゆくとき、その生長を支えるのが太い根である。根が丈夫でしっかりしていれば、木は大きく育つことができる。幹を太くし、枝を広げ、葉を茂らせ、花を咲かせ、実をつける。地上に伸びた木を地中で支えるのが根である。

木が生長しようとするとき、ときには風が吹く。強風で枝が折れることもある。雷が落ちれば、幹までが割れてしまうかもしれない。日照りが続くときには、地中に深く伸びた根でなければ、水を吸い上げることはできない。

木が倒れてしまわないのは、根を大地に深く、また広く伸ばしているからである。根がしっかり大地を踏みしめているからこそ、木は大きくなることができるし、嵐にも早魃にも耐えることができる。

⑤「教養は人間の根である」というのは、順風のなかにあるとき、その教養は、その人の幹と枝を育て、花を咲かせ、また、実をつけさせる。その人を美しく飾る。他方、人がさまざまな困難に遭遇するとき、その困難に打ち克つ力となって、その人を守る。

教養ある人は、よりよい選択をすることによって身を守ることができ、よりよい人生を実現することができる。よい選択をするためには、わたしたちは、まず目の前に現れてくる選択肢を選択肢として認識できなければならない。これができなければ、わたしたちは大切な選択肢を見逃してしまう。選択肢を選択肢として認識できる能力、複数の選択肢のなかから、よりよい選択肢、さらには最善の選択肢を選択するための能力、言い換えれば、最善の選択を支えるのが教養である。

(桑子敏雄『何のための「教養」か』による)

※注

秩序ちつじづける…ものごとの順序や決まりが守られている状態にする。分岐点…ものごとの分かれ目。

回避…よけること。

所与…与えられるもの。

造詣…深い理解や多くの知識。早魃…農作物に必要な雨が長い間降らないこと。

問一 (あ) (え) のカタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

(あ) ゲンシヨウ (い) 根本 (う) 説く (え) カンシン

問二 本文中の「1」には次の一文が入ります。次の文の「」にあてはまる言葉をア～イから選び、記号で答えなさい。

・わたしたちは、自らの誕生を選択すること（ア、ができる イ、はできない）からである。

問三 本文中の「2」にあてはまる二字の熟語を本文中から抜き出して答えなさい。（二か所ある空欄には同じ言葉が入ります。）

問四 — ①「わたしたちは『正しい選択』という」とありますが、「わたしたち」のいう「正しい選択」とはどのようなものですか。
本文中から三十五字以内で抜き出し、始めと終わりの八字を書きなさい。

問五 次の各問いに答えなさい。

(1) 「□つても□れない関係」について、「関係がきわめて深いこと」を意味する言葉になるように、空欄にあてはまる漢字を入れなさい。(□には同じ一字が入ります。)

(2) 本文中の A ・ B に最もよくあてはまる言葉を次のア・エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ただし イ だから ウ それとも エ たしかに

問六 — ②「人生の豊かさ」とありますが、筆者はどのようなことを通して「人生の豊かさ」がもたらされと考えていますか。次のア・エからふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 平和な時代に生まれ、秩序ある社会に暮らし、身の回りにある選択肢から安全なものを選択していくこと。

イ 各自の境遇で、様々な人や出来事と出会うことで生じた選択肢から選び、また新たな物事に会うこと。

ウ 世界の平和のために必要なことを選び、幸せのためなら周囲の批判を恐れることなく決断すること。

エ 生きることが困難な状況におちいった時に、その都度、困難を克服するための賢い選択をすること。

オ 進路に迷った時に、天に与えられた選択肢からただ一つの正解を選び、自分の選択を信じぬくこと。

問七 — ③「わたしがあえて『命綱』と訳したのは、ギリシア語の『カタフィゲー』ということばである」とありますが、筆者が「カタフィゲー」を「命綱」と訳したのはなぜですか。その理由を説明した次の文の（ ）にあてはまる言葉を本文中から十八字で抜き出さない。

・「カタフィゲー」を「避難所」と訳すと、「自分の外部にあつて自分を守ってくれる場所」という意味になるが、「命綱」と訳すと、（ ）という意味となり、教養の本質を表すことが出来るから。

問八 — ④「科学技術者が身に備えるべき『飾り』とありますが、筆者はこの「飾り」を教養の本質とは異なるものだと考えています。ここで述べられている「飾り」とは何ですか。次の言葉に続く形で本文の言葉を使つて説明しなさい。

理工系の学生が将来研究者として生きていくにあたり、

問九 — ⑤「『教養は人間の根である』とありますが、これを説明した次の文章の空欄にあてはまる言葉を、（ 1 ）は二字で考えて書き、（ 2 ）は本文中から五字で抜き出して、それぞれ答えなさい。

・筆者が教養を「人間の根」とたとえたのは、教養が人間の成長を支える（ 1 ）になると考えているからである。根が丈夫でしっかりしていれば木は大きく育ち、幹を太くし、枝を広げ、葉を茂らせ、花を咲かせ、実をつけることが出来るように、人間も教養がしっかり備わっていれば、大きく成長し、よりよい人生を実現することが出来る。

時に、木は強風や雷や日照りによって、倒れてしまう危険もある。しかし、根が大地に深く広く伸びていれば、耐えて生き延びることが出来る。人間の場合も、命の危機に関わるような問題が起きた時、教養がそれらの危機に（ 2 ）となるのである。

問十 — 「教養は幸運なときには飾りであるが、不運のなかにあつては命綱となる」とありますが、教養が「不運のなかにあつては命綱になる」と筆者が考えるのはなぜですか。「困難」・「選択」の二語を必ず用いて、二〜三行で説明しなさい。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

筆者は写真家、ジム・ブランデンバーグに自分の撮った写真を見てもらうことになった。ジムの撮ったオオカミの写真をきっかけに、筆者はジムへのあこがれを抱いていた。

ジムが椅子に座り、ライトボックスのスイッチを入れ、白い蛍光灯の光が周囲を照らしだすと、まるで近未来の宇宙船のコックピットのようにした。ジムは一枚ずつ、台紙に入ったスライド・フィルムをライトボックスの上に並べ、そのなかから気になるものだけを、もうひとつ脇のライトボックスに並べていきました。どういう基準で選んでいるのかまったくわかりません。ぼくは①心臓が押しつぶされそうになりながら、その様子をじっと見つめていました。するとジムは突然、静かに声を出しました。

「オー！ ビューティフル……」

ぼくは耳を疑いました。

「美しい写真なんて、どこにもなかったはず。傷つけないように気をつかってくれているんだ……」

それでもなお、ジムは「きれいだ、きれいだ」とつぶやきながら、写真を選んでは並べつづけ、そしてぼくの方に向きなあって、こんなことを言ったのです。

「……②きみは、いい目をしているね」

ぼくはそれを聞いて、さすがに「ノー！」といって、首を横に振りしました。

「ノー。ノー。わかっています。いい写真じゃないことは。どうぞ正直に。真実を言ってください」

するとジムは、いつものように穏やかなトーンで続けました。

「正直に言っているんだよ。ほら、これなんかとってもきれいだ……」

ジムがそのとき取り上げた一枚は、朝焼けに（あ）ゾまる雲の写真でした。森のシルエットの向こうに広がる雲に朝焼けの光があたつて、紫色の（い）スジがいくつか写っていました。

「あれ？ そんな写真あったっけな……」

それは、あまり見ない空の色だったこともあって、なにげなく撮った写真でした。でも、花や生き物たちの写真に比べれば、構図や光の向きにこだわったわけでもなく、印象に残っていなかったのです。

「その写真……、じつはあんまり覚えてません……」

と答えると、ジムはにこやかな笑みを浮かべて言いました。

「そういうことはよくある。あれこれ考えるよりも、すぐに撮った方がいいこともあるんだ。心が反応したものをね」

ジムは、構図や被写体というよりも、写真の色にとっても敏感に反応しているようでした。その証拠に、選別された方のスライド・フィルムたちが、いつしかさまざまな色彩が入りまじった一枚のステンドグラスのように、美しい輝きを放っていました。こんなに大きなライトボックスは見たことがありません。その上にこんなふうに並べて見てみると、自分はこんなにもカラフルな世界を見ていたのだということを改めて感じて、③新鮮な驚きでした。

だからといって、一枚の写真として見れば、とても良い作品とは呼べません。

「良い写真はありません。ギャラリーに飾ることなんてできない。ひとつも……」

そうつぶやくと、ジムは答えました。

「それには時間がかかるからね……。テクニカルなことは、撮りながら学ばしかない」

ジムは、ルーペでフィルムをのぞきながら話を続けてくれました。

「大切なことは、なにを見ようとしているのか、その心なんだよ。ほら、これなんかも、とっても美しい……」

それは、雨の日に撮った、岩の隙間から10センチくらい伸びていた草の写真でした。その岩の前を通った時、数枚の葉からいまにも滴り落ちそうな水滴がぶらさがっていたので、思い切つて寝ころがって、さらに近くから観察してみたのです。すると雫のひと粒ひと粒に、まわりの世界がさかさまに映されていたのがおもしろくて、何枚もシャッターを切ったのです。しかしできあがってきた写真には、ぼくがそのときに感じたほどの感動は少しも写っていないかったです。けれどジムは、ぼくがなにを撮ろうとしていたのか、その姿勢だけは感じ取ってくれているようでした。

「こうして並べると、きみがなにを見ようとしていたのかがわかる。花や動物ばかりに目がいきがちだね。水滴や雲、森のシルエット。さまざまな色にも反応している。私はそんなきみの視線がとても好きだ。だから、いい目をしていると言ったんだ。それには自信をもつていい」

そんなふうにして、ジムはぼくの写真を見ても否定的なことは一切口にしませんでした。構図をこうしたらいいとか露出がどうか、そういう技術的なこともまったく指摘されませんでした。でも、自分の視線を褒められるからといって、もちろん素直に喜ぶことはできません。あくまで鑑賞に耐えうる作品になっていないことは変えることのできない事実なのです。それでも、あのジム・ブランドンバーグに「いい目をしている」と言ってもらえたことは、とてもありがたいことでした。少なくとも、いま向かっている方向は間違いないのだと感ずることができました。

そうしているうちに、ジムは、シルスイキツツキの写真のなかにアカリスが混じっているのをみつけて④驚きの声をあげました。

「アカリスも樹液をなめにくるんだ。知らなかった。もう何十年もこの森を撮影しているけど、まだ知らないことはあるんだね……」
そう言いながら、ジムは嬉しそうにルーペをかざしてスライドをのぞいていました。ぼくはひと（う）コキユウを置いて、思い切つて質問をしました。

「良い写真が撮れたときは、どんな感じがするものなんですか？」

ジムは、しばらく宙を眺めてから答えました。

「⑤とにかくハードワークするんだ……。努力をする。その先に、ふつとその瞬間がやってくる」

そこまで言ったとき、ジムは天を仰ぐようにして、両手を上に向かって伸ばし、そのまま自分の頭をつつみ込むように降ろしていきました。

「それは……、降りてくるんだよ。こうやって。良い写真というのは、とてもイルーシブなんだ。捕まえようとしてもダメだ」
イルーシブ。つまり幻のようにとらえどころのないもの……。それは、オオカミの形容詞として、枕詞のようにいつもつきまとう言葉でした。

「写真もオオカミも、イルーシブなのか……」

ジムはなおも話を続けてくれました。

「Open your eyes——まずは、目を開いておくことが大事だ。いろんなものに気づくためにね。そしてOpen your heart——心を開いておくことが必要だ。頭で考えるのではなく、あるがままを感じ取れるように」

それを言い終えたあと、ジムは突然「A」笑みを浮かべながら、ひとことつけ加えました。まるで、冗談を思いついたときのように。

「それと、Open your calendar——予定を空けておくことも、大事なことだよ」

それが冗談ではないことに、ぼくはすぐに気がつきました。そこでとつさに「寄り道が大切……でしたよね？」と切り返しました。「その通りだ。寄り道はとても大切なんだ。かつてスコットランドで撮影していたとき、あまり予定を決めていなかった。この道はどこへ続いているんだろうと思ひながら緑の草原で車を走らせていたら、赤い電話ボックスがあつて、その脇に真っ白な羊たちがいた。⑥そのとき撮った写真は、結果、自分でもお気に入りの写真になった。予定をぎっしりつめていたら決して撮れなかった写真だ。初めから撮るものを決めてしまつて、そこだけに向かうことは、つまらないものになる危険がある。」

「B」それがうまくいくこともあるけれどね……」

中略：「ぼく」はジムの写真の話を続けて聞き、そののち、ジムにそこがれるきつかけとなったオオカミの写真撮影した瞬間がどのようなであったか、ジムに尋ねた。

「あれはとてもふしぎな写真なんだ。スタジオのすぐ外で撮ったんだよ。オオカミが向こうから来ているのがわかった瞬間に、とっさに反応してシャッターを切った。どんなふうに撮れたのかあまり覚えていなかった。構図を決めるような時間もなかったからね。そして現像が上がってきたフィルムを見て、驚いた……。良い写真にはそういう驚きがあるものなんだ……」

それを聞いたとき、ぼくはジムと初めて出会ったときの、その穏やかなまなざしと立ち居振る舞いを思い出しました。なにかを撮つてやろうというギラギラした視線というよりは、すべてをうけとめようとする穏やかに澄んだ印象。それは、ジムの撮影の姿勢にも通じるものがあるような気がしたのです。⑦会心の一枚が撮れる瞬間というものは、無心なのかもしれない。その瞬間に出会うべく、努力をしながら生きつづけることが、唯一その境地にたどり着く道のような気がしました。

※「Take a chance」という言葉を知っているかい？」（中略）

「ミステイクを恐れない。そう言い換えてもいい。とにかくシャッターを押してみる。技術や構図は大切だが、すべてをコントロールできるわけではないんだから……」

技術を超えたところにあるものを信じられるかどうか。それが、人の心をつかむ写真を撮れるかどうかに関わる資質なのかもしれない。経験からしか語ることのできない話は、天からの啓示のようで、⑧ぼくはずっとジムの言葉に魅了されつづけていました。

（大竹英洋『そして、ぼくは旅に出た。はじまりの森 ノースウッズ』による）

※注 ライトボックス：蛍光灯が入った箱で、一つの面が半透明のアクリル板でできているもの。 コックピット：操縦席。

ビューティフル：美しい。 トーン：語調。 シルエット：影のように浮かび上がった実景。 被写体：写される対象。

テクニカルな：技術的な。 露出：写真撮影で、レンズのシャッターを開閉してフィルムに光をあてること。

枕詞のように：決まった言葉のように。 立ち居振る舞い：日常の動作における身のこなし。 ミステイク：失敗。ミス。

天からの啓示：人知を超えたものによって真理があらわし示されること。

問一 (あ) (う) のカタカナを漢字に直しなさい。

(あ) ソまる (い) スジ (う) コキユウ

問二 ①「心臓が押しつぶされそうになりながら」とありますが、このときの「ぼく」の心情として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア あせり イ つらさ ウ 緊張 エ 恐怖

問三 ②「きみは、いい目をしているね」とありますが、ジムの言う「いい目をしている」とはどういうことですか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 花や動物といった被写体にしやすいものばかりでなく、何気ない自然の色やシルエットに注目する心があるということ。
イ 水滴や雲のようなはかないものに気がつくことができ、弱くて繊細な存在をいつくしむ感覚があるということ。
ウ 野や森といった自然の悠久さを理解しており、それを一瞬のうちに切り取る技術的なセンスがあるということ。
エ 花の鮮やかな色や雨の日の情景をありのままに撮り、写真を見る者に感動を与える才能があるということ。

問四 ③「新鮮な驚きでした」、④「驚きの声をあげました」とありますが、それぞれ誰のどのような驚きですか。簡潔に説明しなさい。

問五 ⑤「とにかくハードワークするんだ……。努力をする。その先に、ふっとその瞬間がやってくる」について、この内容を次の慣用句で表した場合、次の()に最もよくあてはまる熟語を次のア～エから選び、記号で答えなさい。

・人事を尽くして()を待つ
ア 存命 イ 生命 ウ 運命 エ 天命

問六 本文中の **A**・**B** に最もよくあてはまる言葉をそれぞれのア～エから選び、記号で答えなさい。

A ア へらへらと イ にこりと ウ にやりと エ くすくすと
B ア そこで イ もちろん ウ もしも エ かし

問七 — ⑥「そのとき撮った写真」はジムにとつてどのようなものでしたか。それを説明した次の文の（1）にあてはまる言葉を五字以内で考えて書き、（2）に最もよくあてはまる言葉を次のア～ウから選び、記号で答えなさい。

・ 寄り道をしたことで（1）撮ることができた、（2）ア、幻想的な イ、躍動感がある ウ、色彩豊かな 写真として気に入ったもの。

問八 — ⑦「会心の一枚が撮れる瞬間」というものは、無心なのかもしれない」とはどのようなことですか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 人の心を魅了する写真が撮れる瞬間は、自然を愛し人に思いやりを持たれた時に訪れるのかもしれないということ。

イ 鮮明で美しい写真が撮れる瞬間は、心が軽く気持ちのよい状態にある時に訪れるのかもしれないということ。

ウ 満足のいく良い写真が撮れる瞬間は、欲のない穏やかで澄んだ心持ちの時に訪れるのかもしれないということ。

エ 誰が見ても素晴らしい写真が撮れる瞬間は、努力して全力で生きている時に訪れるのかもしれないということ。

問九 — ⑧「ぼくはずっとジムの言葉に魅了されました」とありますが、筆者がジムの言葉に魅了されたのはなぜですか。その理由を説明した次の文章の（1）・（2）にあてはまる二字の言葉を、それぞれ本文中から抜き出して答えなさい。

・ 良い写真には（1）があるというジムの言葉を聞いて、ジムの撮影の姿勢を思い出し、写真を撮るときに大切なことに気づかされた。このように、ジムの（2）に裏打ちされた言葉が、まるで写真についての天からの啓示のように思われたから。

問十 本文全体を通して、筆者が受け取ったジムのアドバイスの内容を一つ挙げ、自分の生活にどのように生かせるかを百字以内で具体的に書きなさい。

「問題は以上です」